

第四章

近代博物館の始動 - 展示空間の祝祭から嚮動へ

第三章で見たように、1850年から60年代は、近世の展示空間の内面で、ある転換が起こりつつあった時代であった。この転換をまとめるならば、展示空間の基底をゆるがすような思想、すなわち、リンネによる分類体系を基礎とした自然認識や、均質な空間に「物」を配置し、これを比較することによって産業振興の一助としようとする考え方が、日本国内に輸入された、と言えるだろう¹。もちろん近世にあつて、西欧諸国より輸入されたこうした考え方が、即座に展示空間に反映されたわけではない。しかし、新たに国内に紹介された思想は、徐々にしかし着実に、本草学者をはじめとした人々の間に広まり、受け入れられていく。そして、このとき受容された考え方は、明治維新を契機に、展示空間と密接な関係を取り結びながら、博物館、博覧会の基礎を形づくっていくことになる。

本章では、明治において、近世における展示空間が変容していく様相を、思想的、社会的な側面から検討していくこととする。都市部の住民が主な担い手であった近世と異なり、明治以降の展示空間の創出は、政府主導で進められる。近世末期に紹介された西欧の博物学や物産学の考え方が、どのような社会的文脈のなかで意味を持ち、展示空間と結びついたのか、また政府は、近世の展示空間をどのように解体し、再構築したのかを検討する。

なお、具体的には以下の手順で論を進めていくことになる。第一に、明治初期に博物館、博覧の礎を築いた町田久成と田中芳男の博物館像について明らかにしていく。町田久成や田中芳男は、当時の日本が置かれた状況、および政府の喫緊の課題を把握したうえで、展示空間に積極的な意味を見出している。したがって、彼らの博物館像を理解することは、当時の日本政府が展示空間に着目した要因を探ることにもなる。なお、ここで博覧会ではなく、博物館像と称しているのは、明治期中ごろまで日本において博物館と博覧会の趣旨や理念は同義と考えられていたことによる。彼らは、一時的で準備にそれほど時間と労力のかからない博覧会を、博物館創設のステップの一つと考えていたのだった。第二に、わが国で最初の政府主催博覧会、および内国勸業博覧会における博物館関係者の取り組みの実際を検討する。これらの活動の詳細を明らかにすることによって、明治期の博物館、博覧会に期待された教育の内容を明瞭にすることができるだろう。第三に、博物館と博覧会が分化していく過程を取り上げる。博物館と博覧会、それぞれの教育を博物館関係者、政

府はどのように考えていたのか、どのような経緯で分化したのかを考察する。

第一節 町田久成と田中芳男の博物館像

本節では、わが国の博物館の草創期に活躍した町田久成と田中芳男の博物館像を考察する。

明治初期における展示空間の時代的な背景、および展示空間が着目された要因を分析したのち、町田久成、田中芳男それぞれの博物館にかけた思いを明らかにしていくことにしよう。

第一項 明治初期における展示空間の時代的背景

幕府と諸藩が支配機構をなした江戸時代を経て天皇を中心とする国家を建設しようとした新政府にとって、まず解決しなくてはならない課題は「日本」を一つにまとめるということであった。政府が「日本国民」としての自覚を国民にたいしてうながさなければならなかった理由が、西欧諸国と日本の緊張関係にあったことは言うまでもない。**1860年**（万延元）から**5回**にわたって派遣された欧米使節団員たちは、後進国としての日本を目の当たりにした。しかも隣国の清は、アヘン戦争の敗北後、不平等条約を締結し半植民地化されている。どう考えても、逆境を乗り越え、一刻もはやく「富国」を実現しなくてはならない²。新政府は喫緊の課題として、この国家プロジェクトに取り組むことになる。

1860年（万延元）、**1861-2年**（文久1-2）、**1867年**（慶応3）の**3回**、欧米視察を経験していた福澤諭吉は、日本が直面している問題を的確に理解したうえで、日本政府が早急に取り組まなくてはならない課題、つまり国民を一つの「日本」にまとめあげる必要性について、次のように喝破している。

外国にたいして我国を守らんには自由独立の気風を全国に充満せしめ、国中の人々貴賤上下の別なく、其国を自分の身の上に引受け、智者も愚者も目くらも目あきも、各其国人たるの分を盡さざる可らず。英人は英国を以て我本国と思ひ、日本人は日本国を以て、我本国と思ひ、其本国の土地は他人の土地に非ず我国人の土地なれば、本国のため

を思ふこと我家を思ふ如くし、国のためには財を失ふのみならず、一命をも抛て惜むに足らず。是即ち報国の大義なり。固より国の政を為す者は政府にて、其支配を受る者は人民なれども、こは唯便利のために双方の持ち場を分ちらるのみ。一国全体の面目に拘はることに至ては、人民の職分として政府のみに国を預け置き傍よりこれを見物するの理あらんや。すでに日本国の誰、英国の誰と、其姓名の肩書きに国の名あれば其国に住居し起居眠食自由自在なるの権義あり。すでに其権義あれば亦随て其職分なかる可らず³。

ここで福澤は、「国中の人々」の「日本」国民としての自覚の必要性を強調する。鎖国下の近世においては、自国にたいして無関心でいることも、公布された規則や禁令に内在する目的を把握しないままに鵜呑みにすることも許された。しかし、西欧諸国と緊張関係にあった明治初期あっては、これまでの分権的封建制をあらためて、旧諸藩を超えた「日本」の意識化が重要になってくる。国民一人ひとりが「日本」を意識、自覚することにより、「日本」の未来と自分自身のあり方を模索し実践することを、福澤は「人民」に求めたのだった。とはいえ、日本の置かれた厳しい状況把握ののちに、西欧への同化対策にばかりに没頭することについては、福澤は警鐘を鳴らす。このときに大切なのは、日本人としての「自尊心」を失わないことだと彼は言う。

たしかに、当時の日本は強烈な外圧に囲まれており、また西欧諸国との国力格差は誰の眼にも明らかだった。だが、だからといって無条件に西欧諸国に屈するのではなく、あくまで「独立」した国として振る舞い、「西欧」と「対決」することが重要となる。福澤は続けて次のようにいう。

日本とても西洋諸国とても々天地の間にありて、同じ日輪に照らされ、同じ月を眺め、海を共にし、空気を共にし、情合和同じき人民なれば、こゝに余る物は彼に渡し、彼に余る物は我に取り、互いに相教へ互いに相学び、恥じることもなく、誇ることもなく、互いに便利を達し、互に其幸を祈り、天理人道に従て互の交を結び、理のためには「アフリカ」の黒奴にも恐入り、道のためには英吉利、亜米利加の軍艦も恐れず、国の恥辱とありては日本国中の人民一人残らず命を棄てゝ国の威光を落さざるこそ、一国の自由独立と申すべきなり。⁴

福澤の文章には「西洋人もおなじ人」という文言が数多く発見される。たとえ国力において、おおきく水をあけられていたとしても、「道」のためには先進国である西欧にたいして恐れずに立ち向かおうとする「人民」の自尊心の集積を、福澤は当時の日本社会に求めたのだった。そして、このような福澤の主張は、当時の日本の政府関係者の共有するところだったのである。「人民」一人ひとりの「日本人」としての意識化、西欧諸国と対等に渡り合おうとする気概の涵養、この点において展示空間は、明治政府に有効な取り組みとして注目されることになる。次項では、展示空間が着目された要因を確認しておこう。

第二項 文化活動への着目

前項で見たように、植民地化の危機を回避しつつ「独立国」としての日本を確立するためには、「人民独立の気力」⁵がどうしても必要とされたわけだが、それを実現するために取られる政策は、ある程度、「人民」との親近性を保つことを余儀なくされる。ただ単に知識の習得にその目的があれば、学校令のように「命令」で強制的に「人民」を動員し、競争の原理のなかで学ばせることも可能である。しかしながら「気力」ばかりは、上から強制的に植えつけることはできない。政府は、「人民」が自ら進んで取り組む、そのような場の設定の必要性に直面したのである。

結果として、この次元の施策は、新聞や詩歌、戯作小説、芝居、錦絵そして博覧会、博物館など、「人民」にとって身近な文化方面に集中することになった。これらはいずれも、瓦版が新聞に、物産会や見世物が博物館、博覧会へ、と名称は変化していても、祖形が近世にあった活動であり、町人社会を中心に広く人口に膾炙していた文化活動だった。と同時に、近世にあつては取締りの対象になることも少なくない、「悪書」「悪所」だった。明治政府は、近世において広く展開されたこれらの活動に目をつけ、従来の娯楽性、祝祭性をそのままに、しかし巧妙に方向性を修正することを試みたのである。

その一例として新聞のケースをみてみよう。1871年（明治4）、「新聞紙条例」が公布された。ここで政府は、政治批判を禁止している。天変地異や敵討ち、果てには時の為政者を嘲笑するような題材が多く掲載された瓦版は、明治以降、新聞へとその姿を変えたわけだが、政府は街頭で読みながら売られるなど生活のなかに根付いた瓦版の方向修正にさっそく乗り出す。瓦版からつづく生活との密接な関係を保持しつつ、しかし国家を一つの方

その一方で、新聞の持つ危険性を意識しながらも「人民」に広く支持される特質を生かしながら、人々の情動や無意識に訴える力を保持させたい。このような希望を持っていた木戸孝允は「新聞紙ハ人ノ知識ヲ啓蒙スルヲ以テ目的トスヘシ」、と新聞の持つ影響力を肯定的にとらえたうえで、「人ノ智識ヲ啓開スルハ頑固偏偏ノ心ヲ破文明開化ノ域ニ導カントスル也。故ニ内外間ハ所存ノ事実ヲ記シ博ヲ約ニシ遠ヲ近ニシ以テ観客ノ見聞ヲ広メ国家為治ノ万一ニ裨益アランヲ要ス」⁶と述べる。

つまり、ここで木戸は、新聞を通して国民の「心」の文明開化へと導くことが、国家に有益であることを指摘しているのである。さらに具体的な記事の内容にまで、木戸は言及する。「愚案ニ、一之新聞局ヲ開カセ度、内国之事ハ元ヨリ、外国之事モ尽我人民之心得ニ相成候様之事ハ総テ記載させ、偏国偏藩ニ至ルマデ流布仕候様イタシ候」。国内の状況と海外の状況、すなわち「日本」の現状の意識化、と「西欧」の意識化を、新聞を通して図ろうとした⁷。

確認しておきたいのは、木戸がここで言っている「知識の啓蒙」は、学問の深さや教養ではないという点である。むしろ国内外の事実を、より多くの国民に伝え広めることを指しており、これによって国家を治めることに「裨益」となるという。国民にたいして、日々の生活の身の回りのことだけに終始するのではなく、国内外のことを知らせる、それによって自分の所属している国家を認識し、また国家の置かれている状況をも理解しようとする、これが国家を治める重要な布石と考えたのだろう。

そして、このような手法は文化活動のあらゆる側面で確認できたのであり、博物館や博覧会もこの例外ではなかった。近世において生活に根付き、愛され都市部を中心に生活にすでに根づいていた展示空間は、この明治初期の「国家の独立」の具体的方策として、さっそく着手される。

第三項 町田久成と田中芳男の博物館像からみた「日本」

明治初期の博物館、博覧会に政府が期待したこと、それは「日本」国民としての認識にあった。この命題を博物館、博覧会開催の主催者たちは、どのように理解し、自身のなかで問題設定していたのだろうか。本項では、町田久成と田中芳男の考え方を中心に検討していく。両者は明治初期の博物館、博覧会運営の中心的役割を担った人物であり、明治期の博物館、博覧会政策に多大な影響を残している。

1．町田久成を中心としたグループの博物館像

まず、町田久成を中心としたグループの博物館像について検討していく。町田久成は明治維新のころ、外交官として活躍、その後、帝室博物館の創設（現在の東京国立博物館）に尽力した人物である。

ここでは最初に、町田久成のもとで 10 年余りの長きにわたって博物館・博覧会業務に従事した蜷川式胤の文章を引用したい。蜷川は、1872 年（明治 5）に実施された全国社寺宝物調査を町田とともにし、さらに町田が構想する大博物館の建設の「重要な知恵袋」⁸の役割を果たした人物である。蜷川の意見は、彼個人の意見というより、むしろ「大博物館」建設を夢見た町田を中心としたグループの意見の一部であると考えた方が妥当であろう。

さて、京都東寺の公人筆頭⁹の家に生を受けた蜷川は、その生まれと育った環境の影響もあり、古今の宮内庁府内制度に詳しいこと、世間に名高かったという。そのため新政府樹立の際には、日本国の正装を定める規則である服制についての助言を求められ、1868 年（慶応 4）4 月には「服制に関する建言書案」を提出している。以下はその一文である。

古図にも見ゆ衣服の制ハ仕立様ニ而、各国を別つ物故ニ、仕立を先定られ、海外のはて迄も是か 本朝の制と云事を彼より唱ふる様にならされハ、我国の国体並ニ制度相不立、又衣服の制の数か多くてハ、本朝風と云事か他国より見え兼申候事と奉存候¹⁰（強調は筆者による）

ここに、町田たちが博物館にかけた思いの一端が潜んでいる。衣服は各国を分かつ物であるからこそ、他国の模倣するのではなく「本朝風」を追求して、これを諸外国に顕示すべきと、蜷川は強調する。実際、蜷川の「本朝風」への希求は徹底していた。当時、洋装をもって正装とすべしという意見が多数を占めるなか、彼は 7 世紀の宮廷衣装にまでさかのぼって、「本朝風」を捜し求める。さらに、西洋では、日本の僧侶のようにインドの袈裟を身につけることなく、その国々固有の服装のままで仏教を学ぶ者が数多く存在していることに触れて、これを「我国体ノ風義ノ替ラヌ事ヲ主と致シ」と高く評価する¹¹。

ここにみられるように蜷川にとって、他国に流されず、「日本らしさ」を獲得し体現していくことが重要課題であったことは否定しえないであろう。そして、ここにそ「歴史系博

博物館」建設を夢見た町田らとの取り組みの接点が見出せるのである。

実際のところ、町田らが一貫して目指した博物館は「大英博物館」のような重点を歴史に置いた博物館だった¹²。1871年（明治4）には、町田たちを中心とした大学（のちの文部省）のメンバーを中心に「集古館」建設の必要性を太政官に上申までしている¹³。このなかで、世上の乱れに加え、神仏分離にともなう廃仏毀釈によって「天下ノ宝器珍什」がことごとく散逸破壊されつつある現状を「遺憾」としたうえで、「古今時勢ノ沿革ハ勿論往昔ノ制度文物ヲ考証仕候要務ニ有」と、その存在価値について言及した¹⁴。

これによれば、「集古館」設立の目的が、文化財の保護ためだけではないことは明らかである。もし、文化財保護が目的ならば、「展示」は必要ない。そうではなく、「古今時勢ノ沿革」、「往昔ノ制度文物ヲ考証」するところに、彼らは積極的な意味を見出していたのであり、これによって、「本朝風」つまり「日本らしさ」を検証し、理解していく過程にこそ、何よりも大きな課題があったのである。元来、分権的封建制の影響が各所に影を落として「日本」という一つの国家認識が脆弱であったにも関わらず、西欧文化が堰を切ったかのように流入してきた。希薄な「日本」を改めて認識すること、自覚していくことの意義、これを町田たちは目下の課題として設定していたのだった。

だが、忘れてはならないのは、ここで追求された「日本らしさ」とは、あくまで「品位」ある日本であるという点である。たしかに、近世の物産会などでも歴史的遺物が出品され、議論の対象となることもあった。しかし、その内容は近代以降のそれとは大きく異なる。

「ひとはいし人肌石」、やまうばのにぎりめし「山婆糺」といった見方によっては何の変哲のない石に着目し、その石が持つ諸説や生活に根づいた風習などに価値を見出すケースが多々あることは、第一章で述べたところである。それにたいして、明治初期において追求された「日本らしい」歴史的遺物とは、蜷川のいうところの「有名物」¹⁵だった。町田らは、「小野道風書」、「菅公真蹟法華経」といった由緒、由来のはっきりした「古器旧物」のなかに、誇りある日本の姿を見出そうとしたのである。

2．田中芳男の博物館像

つづいて田中芳男の博物館像をみていく。田中芳男は、江戸時代末期、物産学者、伊藤圭介の門下として物産学を学び物産会を経験、維新後は大学南校物産局に出仕し博物館創設の仕事に携わっている。「江戸の物産学・物産会と明治初期の博物館の接点に位置し、そ

の仲介者」¹⁶ともいわれる博物館史において重要な人物である。

以下は、田中が理想とした博物館像を端的に示す資料である。

博物学之所務

動物植物鉱物三科之学ヲ研究シテ、其品物ヲ陳列シ人一見シテ其ノ知識ヲ拡充スルノ益アラシメ、兼テ其書ヲ編輯又翻訳シ普ク人ニ示シ、又有志輩ヲ教導スルコトヲ努ム。外ニ人工物ノ沿革ヲ示シ、人工ノ日新、租ヨリ精ニ入ルノ理ヲ論シ、又書籍館ヲ開キテ有志ノ者ニ珍書奇書ヲ放觀セシムル等ノ務アリ

博物館 天造物 動植鉱物化石等総テ天産ニ属スル諸品ヲ陳列シ、或ハ又稍人工ヲ加ヘテ各種ノ用ヲナスベキコトヲ示ス

人工物 新古内外ノ品物各部門ヲ分チ之ヲ區別シテ、其沿革ト人工ノ進歩且旧器ノ迂濶ナルヲ折衷シテ簡易ノ器ヲ製作スル等ノコトヲ示ス

博物園 一般植物ノ分科竝各種有用ノ品ヲ植ヘ、又生活セル動物ヲ圈養シ其名実ト用トヲ知ラシム

又別ニ一個ノ園圃ヲ設ケ各種有益ノ植物ヲ繁殖セシメ、広ク世ニ施シテ国家經濟ノ資トナシ兼テ培養法ノ試験ヲナス

書籍館 古今和漢ノ書籍ヲ各其部門ヲ分チ之ヲ陳列シ有志輩ノ來觀ヲ許シ、寒生ヲシテ珍書ヲ觀ルコトヲ得シム

博物局 博物館、博物園、書籍院等ヲ総括シテ天造物ヲ記載シ、博物学ノ書ヲ編輯翻訳シ物産ノ応用アルコトヲ一般ニ示シ、又動物ヲ剥製乾枯スル等総テ貯蔵スル工作ヲナシ、又一般會計ヲ主宰ス¹⁷

これは、1872 年（明治 5）に田中を中心に作成された「博物局博物園博物館書籍館建設之案」である。まだ博物館、博覧会の概念が混乱していた時期にあるため、整理しきれていないが、この特徴を一言でいえば、博物館、植物園、書籍館が一体となって、「動物植物鉱物」「人工物」の研究し、展示を行うところにあるだろう。現在のように、「博物館」「植物園」「図書館」が別個の組織として活動するのではなく、これを統括する「博物局」が、三館すべてを管下において、いわゆる「博物学之处務」である研究、展示、関連書籍の編修、翻訳を行うことを目指している。

つまり、田中の考える博物館像とは、博物館、植物園、動物園、研究活動、教育活動が、包括されて一つの組織として成立している点にあった¹⁸。しかし、なぜ田中は植物や動物、天産物、人工物を一堂に展示する必要があると考えたのか。それは、彼の博物館の理想が、「国産の源を開く」¹⁹とところにあったことに由来する。田中は博物館で、国内の森羅万象、すべてを描き出そうとした。そしてそのことによって、「日本」について客観的にも主観的にも理解することができると田中は考えたのである。国内の歴史、産物、生物を目におさめることは、迫力をともなう「神恩」つまり天皇の恩恵を感じさせることができる。同時に、国内の産業や産物について、客観的に把握する意味においても、効果が期待できる。つまり、博物館は「日本」経済を発展させ、「富国」への足掛かりをつくることもできる、このように田中は考えたのだった。

以上、町田と田中の博物館像を検討してきたわけだが、一見すると、両者は別個の目的をもっているかのように見える。しかし、ここでは両者ともに、「日本」という共通したテーマを共有している点に、より注意を払うべきである。いまだ「日本」としての統一感が国民全体に浸透していない明治初期にあつて、町田、田中ともに方法は異なっている、ともに「日本」の意識化を核として文化財、物産を収集し、展示しようとした。

事実、1872年（明治5）に開催された文部省主催の博覧会は、町田と田中の考え方が共存している。博覧会開催に先立って配布された文部省主催博覧会開催の布告には「博覧会ノ旨趣ハ天造人工ノ別ナク宇内ノ産物ヲ蒐集シテ其名称ヲ正シ其用方ヲ弁シ知見ヲ広ムルニ在リ 就中古器旧物ニ至テハ時勢ノ推遷制度ノ沿革ヲ追微ス可キ要件ナルニ因リ嚮者御布告ノ意ニ原ツキ周ク之ヲ羅列シテ世人ノ放観ニ供セント欲ス」²⁰と趣旨が記されている。「天造」「人工」を問わず、産物を収集し、使い方や名称を広く見学者に教授すると同時に、「古器旧物」を通して日本の歴史を理解することを記したこの趣旨からは、この博覧会が、町田と田中の博物館像を融合させての開催であったことをうかがわせるのだ²¹。

第二節 規格化された展示 文部省主催博覧会の開催

「日本国民」としての自覚をうながすための展示空間は、必然的に近世の展示とまったく異なる内容となっていく。本節では、明治維新から4年後の1872年（明治5）に、東京湯島にある昌平坂学問所大成殿で開催された文部省主催の博覧会を検討しながら、展示

空間に期待された教育の内実を明らかにしていきたい²²。

なお、文部省主催博覧会の準備は、**1873 年（明治 6）**に開催されたウィーン万国博覧会へ出品物の準備と同時並行で進められていた。両博覧会の出品物は重なる部分の多いことから、ここでは文部省博覧会とウィーン万国博覧会、双方を検討の対象としている。

第一項 政府主導の展示品収集

博覧会開催の約半月前の **1872 年（明治 5）2 月 24 日**、一枚の摺物が配布された。博覧会開催を知らせる布告である²³。まず、この布告を検討するところからはじめよう。

布告には次のことが記してあった。第一に、一般の人々への展示品の出品の呼びかけ、第二に、出品する際の留意点である。本来であれば、展示品は趣旨に則して文部省側ですべてを準備すべきところである。しかし文部省の収蔵していた物品は「珍品奇物ノ官庫ニ貯フル所亦若干許ニ過ぎ」なかった。したがって、出品の依頼を広く国民に向けて告知する必要があったのだろう。具体的には、「古代ノ器物天造ノ奇品漢洋舶載新造創製等ヲ論セズ之ヲ蔵スル者ハ博物館ニ出シテ」²⁴とあるように、古代の遺物や天然物、さらに外国からの輸入品などを、博物館に出品するよう依頼をしている。

布告のこうした内容をみると、日本初の政府主催博覧会は、ほとんど近世の物産会と同質だったように思われる。しかし、出品依頼に続けて次の一文が付されているところに、近世との大きな違いがあるのだ。布達には以下のような文章がつづいている。「世俗ノ陋見ヲ啓キ且古今ノ同異ヲ知ラシムルト資助ト為スヲ請フ」²⁵。つまり、世間の人々の知識を啓き、古今の相違を会得できるような物品の出品を強調しているのである。これと同様の指摘は、文部省布告の 1 ヶ月前に出されたウィーン万国博覧会への出品依頼の布告文にも見られる。以下では文部省主催博覧会と同時に準備がすすめられたウィーン万国博覧会の収集活動に焦点をあてながら検討することにする。

ウィーン万国博覧会の出品依頼は県単位で行われた。そして各府県に対する博覧会事務局の働きかけは、まさに手取り足取りの指導のもとに展開されたといえる。

各県に配布された布告文には、文部省主催博覧会と同様に、「天造に属せし物（略）博識の資となす人造物」（強調は筆者による）を出品する旨が明記されている。さらに物品の提出方法の注意についても同時に、次のように指示が出された。

故ニ此会ニ出セル物品ノ品位ハ、宇内各国之公評ヲ受ケ、方法ヲ著ハセル論説ハ衆学士之討論ニ供ス。是ヲ以テ天産ノ豊穰ナルハ、其国土壤風氣ノ好キヲ著ハスベク、人造品ノ精良ナルハ其民智慧工藝ノ妙ナルヲ徴スベク、其著述スル諸説ノ精微ナルハ、其窮理學術ノ深キヲ著ハスベキニ由リ、其国ノ榮譽ヲ馳セ繁昌ヲ享クベキモ否ラザルモ其物品ノ善惡工藝ノ精粗ニ由ルベシ²⁶

出品物は日本を代表する物品であるから、「品位」を保ち、「精良」で、さらに物品の説明書については「窮理學術ノ深キヲ著ハス」ような内容でなくてはならないことが、ここには記されている。前述の「博識の資」だけではならず、ここで出品物が持つ重大な責務を強調しているのである²⁷。

しかし、博覧会事務局は各府県に収集を任せるようなことはしなかった。その後も、再三にわたって出品物に関する指示を府県に送りつづける。府県に布告が配布された1ヵ月後、博覧会事務局は、具体的な収集の期限や輸送方法を描く府県に送付して、収集活動の開始を催促し²⁸、さらにその1ヶ月、3月には出品内容、出品物の説明に関する詳細にわたる指示を送付した。

橋詰文彦は、この間の筑摩県の収集の様子を明らかにしている。これによると、博覧会事務局より3月に送付された文書には、217の信濃の産物が記された「信濃国産物大略」が添えられており、「御嶽山ヨリ三笠山辺品」105品、「駒ヶ岳、木曽」の産物34品、そのほか県下各所の産物78品の提出を指定されていたという。またこれと同時に、出品に際する細かな規定、たとえば、動植物の保存方法などについて、指示も出されている。具体的には、鳥獣の類の処理の仕方や、魚を乾燥させる方法、「生活ノ時ノ趣」について書き記しておくこと、貝類その他海老蟹等小さい魚などはアルコール漬にし、製造物は産地並用法を書き添えて提出すること、などである²⁹。また、物の解釈、「著説」の仕方についても以下のように詳細にわたる規定が出された。

天産人造に限らず其品あれば必其方法あり。方法あれば必其説あり。故に其品を著すと雖も其説を著はさざれば博覧に供するとも無詮事と云べし。依て其説を著すこと尤肝要とす。

(…中略…)

器物の変革古今の異なるは凡て図解を以て著すべし。

諸製造の方法及び製造に用ゆる元質の物 譬ば漆器を製する漆木の図より其液を取り之を製し之を塗り之を乾し金銀蒔絵を施す方法とも精く述る如く著すべし。

農業及草木培養の諸術凡て前條の通り著すべし。

天産人造の物品代価古今の相違を著すべし。

製造物凡一年出来高と今との相違竝国用に供すると外国に輸出する員数と其代価の高をも著すべし。

但天産物も之に準すべし。³⁰

これらの指示を受けて、筑摩県は4月3日付けで、飯田出張所や水内郡に、「大略」と博覧会事務局通達を廻状した。だが、博覧会事務局の指示はこれだけにとどまらなかった。4月には、筑摩県にたいして、産物と、その代価を記した「銘書」の提出を求め、これによって、収集状況が芳しくないことを知るや、5月には「博覧会官人」が、県内の巡回に訪れたのである。『奥国博覧会参同紀要』には、府県に布告しても「到底主意貫徹シ難キニ由リ」³¹、1872（明治5）3月から地方へ博物局員を派遣したとある。「博覧会官人」は、県下を巡回したのち、これまで以上に詳細にまでおよぶ指示を記した物産表を作成するとともに、物品収集の担当者の日給を支給することを新たに指示して、東京に戻っていった。このときに新しく作成された物産表は、「生糸蠶卵紙真綿蛹之類 但上中下各種三斤位ツハ 蚕卵紙ハ春子夏子式枚ツハ」といった具合に、非常に細かな指示となっており、これをもとに、ようやく名主らを中心に、5月中旬にかけて県内の収集活動が行われたという³²。

第二項 展示の規定化

こうした一連のいきさつからは、各府県の名主を中心とした人々が、いったい何が「品位」「精良」な品なのか、「窮理學術ノ深キヲ著ハス」説明とは何かが、皆目検討がつかず、困惑する様子が鮮やかに描かれている。

すでにみてきたように、政府はこの当時、「日本」の独立を実現するため、「日本」の名のもとに国民を一つに統合する必要性に直面していた。また、「国家經濟之資」として博物館、博覧会が機能することが求められていた³³。したがって、展示の内容は、見学者が思い思いの興味や関心を引き出し、多様な「日本」の姿を認識するのではなく、一つの明確な方向性、すなわち、「日本」人であること自覚し、「日本」人として奮起するように見学者を導く必

要があったのである。それゆえに、近世のごとく物品の「真偽を問わず」収集し、自由に議論するという手法はどうしても採用するわけにはいかなかった。

ここで重要なのは、「品位」「精良」な物品の判断基準が、国民自身、ひいては生活者である村の人々になかったということである。良否の判断は、見学者や出品者にあるのではなく政府の側にあったのであり、さらに言えば、西欧資本主義社会における価値基準が準用されたのである。だからこそ、天産、人造物の値段、また外国に輸出する場合を見込んで、一年の出来高と輸出可能な数量、代価を記載が指示されたのであった。

いずれにしても、国民の大部分は博物館、博覧会が描こうとする世界が理解できなかった。したがって何が重要で重要でない物品なのか、その判断基準が理解できなかったのである。言い方を変えれば、博物館や博覧会が描こうとした「日本」はすでに決定されていたのであり、ここに国民がアクセスすることはかなわなかったのである。博覧会の出品にともなう一連の動きは、その様子を顕著に物語っている。博覧会事務局は以下のように言う。「世人未ダ博覧会ノ何物タルヲ知ラズ。人民ノ自費出品ハ到底望シ得ベキ所ニ非ザルヲ以テ、政府ニ於テ一切ノ出品ヲ採集セラルハコト、ナレリ」³⁴。

結果として、4月から5月に開催された文部省博覧会では、出品物は約8割を田中や伊藤圭介、官品にまかなうことになった。またウィーン万国博覧会の出品物についても、官品にくわえてシーボルトやワグネルの献言にもとづいて、伝統的物品が多く選択されている³⁵。

一刻も早い「日本」の独立を実現するため、「日本」という一つの組織体のもとに、国民を統合する必要に政府が迫られていたことは、すでに述べたところである。そしてこの目的の遂行に当って、祝祭的性格を持ち合わせ、近世より貴賤を問わず広く受け入れられてきた展示空間に注目が集まり、博覧会が創設された。しかし博覧会は近世のように、「秩序」や「分」を超えたところにある「生活」、「自然」の世界の表出の場としてではなく、一個の正解、すなわち「日本」の意識と将来の方向性を国民に共有させるための場であったため、展示空間を形成するための取り組みの手法も大きく変化する。つまり、展示空間を通して多様な解釈が可能となってはまずいのであり、一つの正解を会得させるための、細心の注意を払った収集活動がなされたのである。展示に相応しい物品と相応しくない物品は、目指す「日本」像を基準に判断され、この判断は、「日本」像理解している者にしかできない。したがって、明治以降の展示空間は、従来のように「真偽を問わず」誰でも出品し、駭蕩と語る場ではなくなったのだった。

ここに、博物館と博覧会は、国家政策の手段としてのスタートを切る。教育といっても、その内容は伝えるべき知識を正確に伝えるところに意義があったのであり、物をとおした教育の本質がここで問われることはなかった。そしてこのことは、博物館・博覧会の目的が、国家の重点課題の変化に合わせて変化することを意味していたのであり、ひいてはのちに博物館、博覧会独自の理念の喪失をもたらす結果となる。

次節では、1870年代後半にかけて、博物館、博覧会の目的が、当初のあり方と変化していく様を見ていくことにする。

第三節 博物館・博覧会と国内産業の充実 - 内国勸業博覧会の開催

西欧の植民地支配の脅威にさらされていた日本は、早急に西欧に対抗しうるだけの国力増強の必要性に迫っていたことは、すでに述べたとおりである。しかし廃藩置県からわずかばかりの時間しか経ていない状況にあって、国民を一つの国家に組織し、国民自身が「日本国民」の自覚をもって、当時の日本が抱える問題に取り組むには様々な困難が依然として横たわっていた。くわえて、1870年代初頭にかけて富国のための負担の増大を感じとった農民による騒擾が頻発³⁶、政府は「護国」のために「日本」という一つの国家を大衆に自覚させる必要に迫られていた。このような状況にあって、有効な解決策の一つとして期待されたのが明治初年の展示空間だったのである³⁷。

さて、当初、国民を「日本人」たらしめ、国家の団結を強く意図した政府であったが、1877年（明治10）前後に、徐々に政策の重点をずらしはじめる。すなわち、国民のなかに「日本」という国家像を形成することからすすんで、国力の充実を図る方針、つまり国内産業の発展に重きを置きはじめたのだ。これにあわせて展示空間のあり方も徐々に変化する。

本節では、国内産業の発展に寄与するよう期待されるようになった経緯、および博覧会が産業育成機能を果たす契機となった第一回内国勸業博覧会における政府の動きを明らかにしていく。

第一項 国内産業の充実の必要性 岩倉使節団の経験

1871年（明治4）の廃藩置県にはじまった兵制、学制、政治制度、銀行制度など新シス

テムの導入は、**1875 年（明治 8）** ごろにひと段落した。そして、これに前後して国内産業の増進に向けた取り組みが政府主導のもとに開始される。政府のトップにいた大久保利通は、**1874 年（明治 7）**、「大凡国の強弱は人民の貧富に由り、人民の貧富は物品の多寡に係る」と、経済活動の充実の重要性を宣言し、「殖産興業に関する建議」を太政大臣三条実美に提出している³⁸。このような政府の重点政策の変化は、博物館、博覧会にも大きな影響を及ぼす。すなわち、国民の「日本国」の意識化に関する取り組みから、国内産業の充実という新たな任務が、博物館、博覧会に課せられるようになったのである。

ところで、**1875 年（明治 8）** 前後を境にした政策、およびそれに付随した博物館・博覧会の重点の変化に、大きな影響を与えたのは、**1872 年（明治 5）** から約 2 年近くにわたって西欧諸国を遍歴した岩倉使節団での政府関係者の経験であった。すでに述べたように、**1872 年（明治 4）** 7 月の廃藩置県をもって、日本はかたちのうえでは近代的集権国家制度となる。しかし、藩の廃止にともなう税制や、財政の統一、兵制、銀行制度や株式会社の導入など処理すべき課題が山積みであった。しかも、これらの変革はいずれも、政府関係者の経験や想像でカバーするにはあまりにテーマが大きすぎた。

国の方向性を決定する重要な時期であるからこそ、諸々の制度が目指すところ、その本質を、西欧諸国から直接、学ぶ必要に迫られた政府は、**1872 年（明治 5）11 月**に、正使・右大臣岩倉具視、副使・参議木戸孝允、大蔵卿大久保利通、工部大輔伊藤博文とした首脳陣で組織した総勢 **107 名**の大規模な使節団－岩倉使節団－を西欧諸国に派遣する。使節団の目的が、条約交渉よりも欧米の制度や文物の調査に重きが置かれていたことは言うまでもない。なお、銀行制度や兵制などにくわえて、教育制度の調査も重要な調査項目の一つに数えられていたが、数ある教育機関のなかでも訪問した博物館数の多さは群を抜いていた。それだけを見ても、岩倉使節団の経験が、日本の博物館・博覧会に与えた影響の大きさをうかがい知ることができる。

そこで本項では、岩倉使節団での博物館、博覧会を通じた認識について考察を進めていく。特に、使節団団員であった久米邦武（権少外史）が編集した『特命全権大使米欧回覧実記』（以下『実記』と記す）に記載された博物館は博覧会に関する内容を取り上げる。ここで『実記』を取りあげるのは、これが日記式の記録で、筆録者による論評や所感の記事も含まれており、生の直截的な観察報告書であるためである³⁹。また、これは岩倉が久米に命じて記録に当らせ、一般国民に対する啓蒙と西欧紹介をねらいに刊行させた物であった。したがって、当時の政府関係者の感想および政府がそのなかでも何を国民に知らしめ、

啓蒙しようとしたのかを検討するうえで適していると考えられる。

アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ベルギーをはじめとした西欧諸国を巡るなかで、岩倉使節団の団員たちをとらえたのは、進歩を可能とした要因、国家の富強の背景にいったい何があるのか、という思いであった。彼らはさまざまな国をまわり、さまざまに見聞するなかで、この問いに対する一つの回答を導き出す。それは「独立自主の個人の力」⁴⁰の強さの如何である。いかにして国民の独立自主の力を引き出すか、これが国家富強の鍵を握ると考えた使節団員は、さまざまな施設、訪問先の人々の言説に最大の注意を傾けた。

そして、このとき国民の独立自主を引き出す有効な場所として注目されたのが博物館であった。使節団が訪れた博物館は総計 **50** 館以上に及んでおり、数ある見学先のなかでも群を抜いている。なお、表 1 は、久米邦武が見学した博物館、博覧会、もしくはこれに類似した施設の一覧である。

さて、久米の博物館、博覧会認識を検討していくと、「自主の精神」涵養の場として、博物館や博覧会を高く評価していたことが分かる。博物館や博覧会は、学校教育など他の教育機関、方法と異なり、「目視の感は、耳聴の感より、人に入ること緊切なる物」であることから「民の自主の精神」を喚起するのに優れた機会である。複数の国々を見聞した結果、スイスやベルギーといった小国であっても、大国に脅威を抱かせるだけの技術力を有することを目の当たりにした久米は、「国民自在ノ生理ニ於テハ、大モ畏ルニ足ラス、少モ侮ルベカラス」⁴¹と述べているように、後進国である日本の未来に、大きな希望を見出していた。日本の行く末はひとえに「民の自主の精神」にかかっている、自分自身が自分の主となって支配し、自ら考え判断する「自主の精神」を国民一人一人が徹底することが、富国への近道であることを、久米は岩倉使節団での見聞をとおして確信したのである。

とくに「自主の精神」の涵養によって、すなわち国民一人ひとりの努力によって「国家之経済」が成長していくところに、久米は魅了されていたようだ。したがって、久米は「国家之経済」の発展に際して、博物館や博覧会が果たす役割に期待をかけている。その証左は『実記』に散見できる。たとえば大英博物館を見学した彼は、その感想について次のように記している。

国の興るや、其理蘊の衷を繙くこと、我爾として然る物にあらず、必ず順序あり、先知の物之を後知に伝へ、先覚の物後覚を覚して、漸を以て進む、之を名づけて進歩と云ふ、進歩とは、旧を捨て、新きを図るの謂に非ざるなり、故に国の成立する、自ら結習あり、習ひによりて其美を研氏出す。知の解明に、自ら源由あり、由によりて其善を発成す、其順序を瞭示する博物館よりよきはなし⁴²

「旧」を軽視する現状に苦言を呈する主張は、明治維新後、一貫して主張されてきたところである。だが、彼が保護する「旧」は、あくまで「新」にいたる過程としての価値に過ぎない。言いかえれば「旧」だけの展示は、久米にとって意味がなかったのである。したがって、彼にとって、「旧」のみの展示を行う場所は「博物館」とは呼べず、物を「集め」「蔵」する場所ではなかった。事実、久米は芸術関係のみを扱う物に関しては、「蔵画館」「集画館」という名称を用い、また、宮中のコレクションについても、「博物館」という名称を冠していない。旧から新にいたるまでの経過を示して、初めて見学者にたいして、「今より後の勤勉せざるへからざるを感ず、勘合に心に動き、学習の年沛然として制すへからず」⁴³という感情を喚起することができる。

つまり、時系列展示により、見学者の多くは「進歩の序」を自ずと発見する。どれほど能力、技術が劣ろうとも刻苦勉励することにより、必ずや早晚その結果はもたらされる、これを読み取り、見学者の心のうちに、進歩を希求する心を喚起させるところに博物館の意味を久米は見出したのであった。

博覧会についても、博物館と同様、「国家之経済」に着目した視点から、その意義を強調する。第三章でみてきたように、博覧会場には各国の夥しい量の物品が展示され、国家の技術力の差異が顕著にあらわれる。これを前にして「己ノ及ハサル所以」、すなわち日本が他国に劣る点を自分のこととして受け止めて、「今ヨリ工夫スヘキ要ヲ考ヘ」ることが博覧会の趣旨であり、これによって国家の「貿易」「製作」「知見」は進化し、「富強」の礎となるとしている⁴⁴。

このように久米は、博物館、博覧会のなかに、「国家之経済」とくに技術力の進歩の一助としての役割に意義を見出していたといえよう。むろん、この視点は、明治維新後の福澤諭吉や田中芳男らの視点においてもその萌芽を確認することができる。しかし、明治維新直後において十分に意識化されていなかった経済や技術への期待が、1875年頃（明治8

年)に急速に高まっていったことは明らかである。と同時に、旧物を通して「日本」という一つの組織体のもとに、国民を統合させようとする試みは、次第に衰退していくようになる。

ところで久米の博物館、博覧会への認識は、「国家之経済」に収斂されて、ほぼ同義で用いられていたわけであるが、これは久米に限ったことではない。ウィーン万国博覧会事務副総裁であった佐野常民もまた、博物館や博覧会を国内産業の充実のための施設ととらえている、佐野は次のように述べる。「博物館を創建するを計り芸術を解明して士民を勧導し物産を繁殖するの諸業を広く内国に伝播する方法を設け又後年東洋に屹立し博覧会を催すの基礎を作す」⁴⁵。博覧会も博物館も産業を興し、これを国内全土に伝播するうえで、非常に有益な機会足りうる、したがって両者に違いはなく、博物館を創設するのは、後年、博覧会開催の基礎をつくるだ、というのである。佐野の主張は徹底しており、単に展示だけにとどまらず、イギリスの「サウツ、ケンシントン博物館」(現在のヴィクトリア・アルバート博物館)のように、「智学芸術ノ学校」を博物館内に設け、「工商ノ事業ヲ勧奨」することを献言するほどであった⁴⁶。

以上のように、1875年(明治8)ごろより、博物館、博覧会は、国内産業育成機会に重点を絞って大きく舵を切りはじめる。1875年(明治8)3月30日、トップに大久保利通を据えて国内産業振興の旗振りをした新設の内務省に、博覧会事務局が博物館と改称されて移管されたのを皮切りに、山下門内にあった博物館(ウィーン万国博覧会における出品物を一堂に集め展示した物)の展示内容、分類方法も徐々に変化している。

例をあげれば、1874年(明治7)5月には、これまでの「天産」「考証物品」にくわえて「工業物品」が追加されており、翌年11月に、「天産部」「農業山林部」「工芸部」「芸術部」「史伝部」「教育部」「法教部」「陸海軍部」と装いを一変させている。なお、ここでいう「芸術」とは、今日の「芸術」と意を異にしており、陶磁・七宝・彫刻・織物といった日本の優れた技術により輸出を期待された物品が相当していたのであり、あくまで国内産業保育助長の枠組みでとらえられていたことがわかる⁴⁷。なお、表2は、大久保が太政大臣に上申した「博物館之儀」に記された展示分類をまとめたものである。

第一 天産部

第二 農業樹林之部

第一類 農業上ノ植物

- 第二類 農業上ノ動物
- 第三類 樹林ノ所産品
- 第四類 器具
- 第三 工芸ノ部
 - 第一類 動植鉱ヨリ得ル所ノ元品
 - 第二類 製鍊及ヒ化学工芸
 - 第三類 器具機械上工芸ノ産物
 - 第四類 器具機械
 - 第五類 建築土木
 - 第六類 工芸土木学上ノ器械

表 2 「博物館之義」

(『例規録』 1875 年 7 月より)

表 2 から明らかなように、物産の活用方法や、各種生産品、制作方法の紹介に充てられており、かつて中心を占めた「天産」「考証」に関する内容は隅に追いやられていることがわかる。

第二項 内国勸業博覧会の開催

1875 年（明治 8）前後から、展示空間には国内産業の充実にむけた国民教育という役割が課せられるようになる。しかし、それ以前と重点が違っていたとしても、展示をとおして伝えるべき内容が事前に決定しているという事実は変わらない。すなわち、ここでも 1872 年（明治 5）に開催された文部省主催博覧会と同様に、政府によって慎重に展示品が選別されていたし、それを受け入れる存在として見学者の立場は固定していた。本項では、博覧会が産業育成機能を果たす契機となった第一回内国勸業博覧会における展示品の収集の経緯について見ていくことにしよう。

1877 年（明治 10）8 月 21 日、日本初の本格的な産業博覧会が開催された。その後、5 回まで開催された内国勸業博覧会の開催された幕開けである。

内国勸業博覧会の趣旨はいうまでもなく「国内産業の増長」にあった。開催の趣旨には「考証に供す」「職工を励ます」「現時の製造具・芸術を教習するの媒介となる」「需要を益

す」の4点が列記されている。会期中45万人物人々を動員した内国勸業博覧会は、一見すると時代の要請に呼応した取り組みであるかのように見受けられる。しかしその背景で、政府が趣旨を貫徹するための戦略をくまなく張り巡らせていたことを忘れてはならない。それは、たとえば出品物の収集に際しての政府の働きかけからも明らかである。展示品は見学者にたいして、もっとも開催の趣旨を饒舌に語る場所である。政府が出品物の収集にナーバスにならないわけがなかった。

実際、内国勸業博覧会事務局は、博覧会の開催が決定するや、「出品者心得」を発行している。ここには博覧会開催の目的が記されているが、くわえてこの目的と合致しない出品を受け取らない旨を次のように明記していた。

博覧会は後日諸業の益々繁盛せんことを謀るため、御国内に産する種々の品物を一場に集めて其美悪を見分け、産物の位を定むる物なれば、農工共其術技日頃の鍛錬を示し他人に負ぬ様、精々骨折て誉をあらはす」、「珍敷品物たりとも都てかたわの鳥獣虫魚又は古代の瓦、曲玉、書画等の類は此会に出すべからず（強調は筆者による）⁴⁸

この文章のなかで、政府は近世以来の物産会や見世物といった展示空間と、内国勸業博覧会は、まったくその意図を異にすることについて念を押している。またここで、次第に展示の片隅に追いやられつつあった古器旧物は、完全に博覧会の開場から姿を消すことになった。

もちろん、「出品者心得」だけで、博覧会の趣旨が貫徹されるはずがない。この博覧会の開催が決定した数ヵ月後、1876年（明治9）8月28日から7日間、内国勸業博覧会事務局に、各府県の勸業課職員が、一同に顔を合わせた。招集された府県の勸業課職員たちは、いずれも内国勸業博覧会の開催について、宣伝し、物品の収集にあたる担当者である。内国勸業博覧会事務局の担当者は、この場で、博覧会開催の目的をくりかえし強調、政府が望むところの出品物の内容を詳細にわたって伝えた。あわせて、優秀な出品物には褒賞がくだされること、送料の半額を三菱会社が負担することも公示している。

これを受けた各府県の勸業課職員たちは、各地に戻って、出品に関する部署を新たに設置し、支庁に出品委員・出品世話掛や出品取扱人を配置して出品物の収集に着手した。たとえば、東京府の場合は、出品世話掛が設置され、これが担当管内の農商工業者の調査にあたっている。高村光雲は、このときの様子を「掛かりの人たちが勧誘に出て、諸商店、

工人などの家々に行って、博覧会という物の趣旨などを説き、また出品の順序手続きといったような物を詳しく世話をして、分からんことは面倒を厭わず、説明もすれば勧誘もするという風に、なかなか世話を焼いて廻った物であった」⁴⁹と回想している。「博覧会」とは何か、その趣旨を理解できない人々にたいして、人海戦術で、布教してまわる職員の姿が日本各地で見られた。

ここでは、試みに札幌本庁の出品の状況をみたい。北海道では非売品、売品を含め総点数 270 点のうち 9 割近くの 239 点を官が出品している⁵⁰。ここからも、官主導で博覧会の準備が進められたことが、容易に想像できる。とはいえ、展示品を収集してまわった職員は大変な苦勞をしたようだ。各地を行脚してまわって人々を説得した勸業課職員の苦しい胸にうちが、報告書に、「人民ノ自費出品スル者ナシ」、「人民未ダ遂ニ開設ノ主旨ヲ領会セル自費出品者甚少シ多クハ官ニ買上ケ出品ス」⁵¹などと残されている。博覧会の趣旨を理解する人の少なさ、趣旨に即した物品の少なさに、各地方の職員は直面したようである。

こうした各地の職員の必死の勧誘の甲斐もあって、第一回内国勸業博覧会は、1877 年(明治 10) 8 月 21 日、上野公園に賑々しく開幕した。8 万 4 千 352 点、これが全国から集められた展示品の総数である。これらの出品物は、鉱業・冶金業・製造物・美術・機械・農業・園芸の六部門に分類され、それぞれ、新しく建設された、東本館、西本館、美術館、機械館、農業館、園芸館、動物館、美術館に、府県別に分類されて展示された⁵²。

展示品のなかには、「舶来品」を模造した国内製品も多く出展されている。「白地ノ手袋、西洋風眼鏡、洋服用襟紙、西洋風手拭、藤造椅子、外科外具、椅子等ニ用ユル縁飾、麥藁帽子、フランネル地、石鹼数種、摺附木、臥床榻椅、馬車の馬具」⁵³など枚挙にいとまがない。西洋の文物を輸入するばかりでなく、自国で生産していこうとするねらいが、そこにはあった。これを見学した矢野龍溪は、「此度会場に於て余輩をして最も注目せしめ、余輩をして最も欣喜せしめし者」と、深い感慨を日記に記している⁵⁴。

このように、国民に「西欧」の存在を意識させ、これによって「日本」国民としての自覚をうながすという明治初期の展示空間の目的は、国内産業の充実への移行したわけであるが、展示にいたるまでの手法は、当初のやり方を踏襲している。つまり、見学者が展示をとおして理解すべきことが事前に決定していたであり、その路線から少しでも外れることがないよう政府は細心の注意をはらっていたのである。

先を急ぐと、国内産業を牽引した博覧会は、内在していた問題を次第に露呈させて、1897 年(明治 30)を最後に国家主導での開催は行われなくなる。ここでいう内在する問題とは、

国民統一と産業振興の矛盾である。個々の企業や個人の発展は、次第に国家を超えた自由な売買と、個人の富の蓄積をもたらし、国民統一と矛盾をきたすことになった。その結果、明治末期には再び、国民統合の再編強化の方策が叫ばれるようになり、ここにふたたび博物館に注目が集まるようになったのである。そしてこのとき初めて、博物館は「庶衆」を教育する社会教育機関として正式に位置づくことになる。この点は、最終章にくわしく述べることにする。

第四節 博物館と博覧会の分化

博物館と博覧会が明治初年において、ほとんど差異がなかったことはすでに述べた。ときには、博覧会が会期終了後に博物館として常設化されることもあった。両者はまさに、理念を共有しあいながら手に手を取り合って発展していったのである。

しかし、国内産業の充実への重点政策の移行は、こうした博物館と博覧会の蜜月に終わりを告げる。ハイスピードで発展を遂げる産業の展示には、常設の博物館よりも臨時開催の博覧会の方が、フットワークが軽く適していたのだ。結果的に、**1880**年代以降、博物館は博覧会と異なる道を歩みはじめることになる。この過程において、東京博物館（のちの東京教育博物館、現在の国立科学博物館）や帝室博物館（現在の東京国立博物館）が開館、博覧会と異なる性格を帯びるようになった。本節では、博覧会と分化した博物館のその後を検討していくことにしよう。

まず、勸業系の博物館の行く末を追ってみたい。この点については、佐々木和博が宮城県を事例に詳細を明らかにしている。**1879**年（明治**12**）宮城県の議会で、博物館の設置にむけた問題が活発に議論されていた。「博物館ハ奨励ノ為メ欠ク可カラサル者ナリ」、「人民モ亦タ此博物館ヨリ發明スル所ナシトモスヘカラズ」、「博物館ハ勸業上欠ク可能カラザル緊要的ノ物ナレハ一日モ原ク設置スルニハ如カザルナリ」⁵⁵、こうした議員の発言の数々は政府の方向性をそのままに踏襲している。おおむね、議会は博物館の設立に前向きだったようだ。しかし、**1879**年（明治**12**）の時点では博物館の建坪や場所も確定し設立の見通しが立っていたにも関わらず、翌年度の予算にこれらの経費は計上されていない。のちに新たに博物館を建設するという案に代わって、博覧会に用いた建物を博物館に転用するという案が出される物の、**1883**年（明治**16**）には、この建物までもが売却されてい

る。結局、宮城県において博物館が設立されることはなかった。

こうした例は、宮城県だけに限らないだろう。当時、博物館と博覧会の目的はともに「勸業」にあった。別の言い方をすれば、「勸業」以外に、博物館、博覧会の存在価値はなかった。しかも「勸業」という点からみると、博物館は明らかに博覧会より不利である。スピードが求められる産業にあつて、どう考えても常設の博物館より仮設の博覧会の方が対応も早く適している。しかし、博物館は「勸業」に代わる目的を持っていなかった。つまり「勸業」に適さない博物館は、その教育目的を失ったのである。

それでは、博物館にとって非常に厳しい時代に開館した東京博物館や帝室博物館はどのような目的のもとに、活動をつづけていたのだろうか。結論からいえば、一方は学校教材や教育道具を扱う、つまり学校関係者を対象とした博物館となり、もう一方は、皇室の財産の保護、保存を目的とした博物館となった。一見すると博物館が開館したことは、博物館史において画期的な出来事に見えるが、しかし、ここで重要なのは博物館が「庶衆」に対する教育という役割を、博覧会に明け渡すことになったということである。

たとえば、1882 年（明治 15）に開館した山下町博物館（のちの帝室博物館、東京国立博物館）は、その主たる目的を皇室の資産の整理、研究、保存に移行していく。なお、「蒐集ハ勉メテ沿革上ニ照シテ之ヲ行ヒ各時代各大家ノ表準タルベキ製作ハ博ク之ヲ網羅シ完全ナル秩序ヲ保ツベシ」⁵⁶とあるように、天産の資料や、名もない人々の生活用品を主として扱う考古学資料は、栄えある皇祖の歴史を示すにはふさわしくないと考えられ排除されている。

また 1877 年（明治 10）に開館した東京博物館は⁵⁷、教育を専門とした博物館として活動を続けていた。教育博物館の主たる業務内容は、1.教育品の収集陳列、2.教育図書の閲覧、3.教育参考品の館外貸出で、展示品は、校舎、教室の模型、教授器具、教授標本、学校衛生に関する諸設備模型及教科用書、教授法、教授細目に関する記録⁵⁸などだった。そのため、教育関係者以外の興味を惹く内容とはいえず、東京博物館は大衆との接点を失っていく。事実、学校教育の整備がある程度、落ち着いた 1900 年ごろには、教育博物館の活動の意味自体が曖昧な物となり、明治末期には、教育博物館は、ほとんど忘れられた存在となってしまう。設立から 20 年後の教育博物館は、展示品の多くが時勢に遅れているところの器具となり⁵⁹、博物館内は薄暗く、「狭い所にギツシリ詰込んだのであるから、容易に側にも寄れない程であるから、細かな物になると到底よく見ることは出来ない」⁶⁰と見学者が記すように、まさに忘れられた物置のような存在だったのである⁶¹

いずれにしても、博物館も博覧会も目前の問題の解決策として、「庶衆」にたいして働きかけつづけ、その結果、本質的な教育の議論は行われぬままに実践のみが積み重ねられていった。明治期の変革の思想について坂田吉雄は「体系的理論的に裏付けられた何等かの理念を実現するために変革がおこなわれた物ではなく、差し迫った現実の困難を解決するため試行錯誤的に色々なアイディアが考え出されたり採り入れられたりした物にすぎなかった。西洋から採り入れられたアイディアも西洋思想の裏付けを伴って採り入れられた物ではなく、現実的な困難の処理の手段として採り入れられたにすぎない」⁶²と指摘しているが、この指摘は博物館や博覧会にも当てはまる。博物館と博覧会は、1880年代以降に分化する。しかし博覧会と博物館の教育がいったい何であるかが、十分に議論された結果の分化ではなかったことだけは明らかである。

小括

明治維新後、博物館、博覧会が政府に着目された要因、政府が企図した教育目的について本章では考察してきた。

全体をとおして指摘できるのは、博物館や博覧会といった展示空間が、国民の「自主の精神」を涵養するのに優れていると、政府によって考えられていたという点である。もちろん「自主の精神」と一言でいっても内容はさまざまである。博物館、博覧会は、明治初年にあっては「日本国民」としての自覚をうながすための場として、1880年代以降は国内産業の振興の場として期待された。しかし両者ともに強制ではなく、見学者がすすんで感じ取る場所に価値が見出されている。すでに見てきたように、祝祭的要素を併せ持つ展示空間は、貴賤を問わず多くの人々を魅了してやまなかった。政府はこうした展示空間の特質に着目をする。すなわち、上からの指導によって強制的に学ばせるのではなく、国民自らが進んで足を運び、国家が提供するメッセージを受容する場、それが政府の考えるところの博物館であり博覧会だったのである。富国のため、国民をあげて問題の共有化し意識化していくことの必要性を痛感していた政府が、展示空間に着目したのはごく自然な流れだったのだろう。

近世において展示空間およびそれを支えた活動の多くは、物を無秩序なままに放置し、世の中の混沌をそのままに、複合的にとらえ返そうとする試みでもあった。つまり、ある

一定の方向性を持たないがゆえに、現在ある言葉で簡単に表現することではおさまりきらない、それぞれの生活のなかでの思いや疑問を、議論を通してゆつくりと解き明かしていくこと、言いかえれば、簡単に言語化できない思いを、表出させようとする作業であった。これにたいして、明治の展示空間の背景にある考え方、さらに具体的な方法は、すべてある一定の方向へ導くための作業だったといえる。これは「自主の精神」の内容があらかじめ方向づけられていたことから明らかである。容易に言語にすることができない個々の思いを表出する空間の創出は、博物館や博覧会の目指すところではない。むしろ見学者が容易に、理解したところを言葉で表現できるよう、つまり「正解」へと導くことができるように、細心の注意があらゆる側面から図られたのであり、この「正解」を見学者自らが、教えずとも読み取るこそが、目指す「自主の精神」だったのである。

このような方法の転換は、近世からの展示空間のあり方を大きく変容させた。なぜなら、博物館、博覧会政策を主導した政府が目指す「日本」の今後の方向性や、「日本」像は、すでに決定されていたために、展示空間を形づくる世界観を共有していない見学者は、近世のように展示にアクセスすることができなくなったからである。

本章では、明治期の博覧会、博物館開催を支えた取り組みを見てきたわけであるが、上記のような特質が具体的にどのようなかたちで、展示空間に反映されたのかを、次章で検討していく。

第四章

¹ 動植鉱物の分類と体系化をとおして自然を理解しようとした西洋博物学や、有用、無用の点から動植鉱物とらえようとする物産学と、近世の物産学の考え方の間には埋めがたい懸隔がある。同時に、自然を人間との関わりのなかで理解しようとする物産会の考え方の間には、根本的な相違があった。

² 実際のところ、当時の日本は、西欧植民地化の危機が眼前に迫る逆境にあったのである。その顕著な例が西欧諸国と結んだ条約の数々だ。外国人の治外法権を認める領事裁判権にはじまり、相手国の同意なくして関税を改正できないため極めて低率に釘付けされる協定関税率、最恵国条款、さらに安政条約（1858年）では、35%の輸出入税であるのに対し、これを従量5%に引き下げにくわえて貿易・交通に対する制限の撤去、貿易への便宜供給を約束するにいたる。この新税率は清国並みの低率であり、アジア諸国の植民地化を推し進めていこうとする西欧諸国の脅威がすぐそこにまで迫っていた。

³ 前掲、『学問のすゝめ』3編、p.45。

⁴ 同前、初編、p.31。

⁵ 同前、5編、p.31。

⁶ 『新聞雑誌』日新堂、1971年5月。

⁷ 1877年（明治10）に学校教育以外の教育「各種教育」として、書籍・新聞紙・書籍館・博物館があげられている。（文部省『日本教育史略』1877年、pp.47—51）

⁸ 関秀夫『博物館の誕生—町田久成と東京帝室博物館』岩波新書、2005年、p.168。

⁹ 公人とは、三綱、中庸、職掌の中間に位置する役職で、俗体でありながら半僧体の「候人」と同じ待遇を指す（米崎清美「解題」『奈良の筋道』中央公論美術出版、2005年、p.440）。

¹⁰ 蜷川式胤「服制に関する建言書案」1868年4月、（同前、『奈良の筋道』pp.414-415）。

¹¹ 蜷川式胤「四月一五日 献言如左」1868年4月、（同前、『奈良の筋道』p.422）。

¹² 町田の博物館、博覧会政策に同調し彼の良き理解者であった内田正雄は、大英博物館を『輿地誌畧』のなかで次のように描く。

世界ノ万有ヲ網羅シテ其貯蓄ノ富亦欧州ニ冠タリ（…中略…）最モ浩瀚ニシテ希世ノ珍ヲ集メタルハ古物ノ部ニシテ其中又希臘、羅馬、亜細里（アウシリア）、邦（ポン）貝（ペイ）、埃及（エジプト）、印土（インジャ）等別室ヲ区画シ殊ニ大理石ヲ以テ彫刻シタル貴重ノ石像等皆数千載ノ遺物ニシテ他邦ノ博物館ニ比類ナキ物多シ

（内田正雄『輿地誌畧』2篇1、石川県学校蔵版、1873年、49—50丁）

また町田は大英博物館での感想を記録していないが、1873年5月26日に町田が太政官にたいして上申した『大博物館建設の必要』のなかに、「英国フリチシ博物館はイロランと云人の集聚品及古書籍、古文書等、千七百五十三年、官に収めしを始祖とし、其後、尚古家及富饒家等より寄付献納の物を合併し、遂に今日の盛大を致すに至れり」と、今後日本が目指す博物館モデルとして大英博物館を引用していることから、彼の心に深く大英博物館が刻み込まれていたことがうかがえる。

¹³ 「古器旧物保護ノ儀御布達申立・附出雲国造へ別途御達申立」（公文録・第39巻、1871年、国立公文書館所蔵）。

¹⁴ 1871年5月に古器旧物保存の布告が發布された。内容は以下のとおり。「古器旧物ノ類ハ、古今時勢ノ変遷、制度・風俗ノ沿革ヲ考証シ候為メ、其裨益不少候処、自然厭旧競新候流弊ヨリ追々遺失毀壞ニ及候テハ実ニ可愛惜事ニ候條、各地方ニ於テ厭世蔵貯致居候古器舊物類別紙

品物ノ通、細大ヲ不論厚保全可致候事」（「古器旧物各地方ニ於テ保存」『太政類典』第1編・第97巻、国立公文書館所蔵）

¹⁵ 蜷川式胤『奈良之筋道』（前掲、『奈良の筋道』p.199）。

¹⁶ 『東京国立博物館百年史』東京国立博物館、1972年、p.8。

¹⁷ 同前、p.64。

¹⁸ この考え方は、上記以外にも、彼が従事した事業のあらゆる側面で確認することができる。その一つが1867年大坂、舎密局建設案であり、また、1881年に提出された植物園・動物園建設案である。

1867年6月、田中芳男は、開成所（のちの東京大学）内、理化学学校の大坂移転にともなう舎密局、すなわち化学教育施設の建設計画を任される。このとき田中は、A. 山や蓮池を配したなかに植物を植え、自然の景観を保った遊歩区域、B. 花木園と日本産鳥獣の展覧区域、C. 草花を主とした薬用植物園区域、D. 金石などの標本を陳列した区域、E. 教育施設としての舎密局の所在する区域、で構成されており、展示、教育施設、自然環境の保存が、一体となった施設を計画した。

また、1881年4月、博物館が内務省から農商務省に移管された当日、田中は植物園と動物園が一体となった博物館建設案を持ち出している。（椎名仙卓「黎明期の博物館を構想した田中芳男」『日本の博物館の父 田中芳男展』飯田市美術博物館、1999年、p.70）

以上のような田中の博物館構想は、そもそもパリのシャルダンデプラントすなわち国立自然誌博物館に、その祖形があるといわれている。シャルダンデプラントは、広大な敷地の中に、鉱物展示館、動物園、自然園、研究棟を有し、さらに比較生理学講座、物理学講座など各種講座を開設する教育施設をも兼備した博物館である。

¹⁹ なお、1889年に神苑会から農業館建設を委嘱された田中芳男は、1891年に、農林水産業、園芸、畜産の情報を提供する博物館（のちの徴古館）を企画している。

²⁰ 田中芳男『博物帖』東京大学総合図書館田中芳男文庫蔵。

²¹ 博覧会終了後は「博物館」と名称を変更し、毎月1と6の日に開館、一般に公開することになった。また博覧会開催に携わった文部省少史、蜷川式胤は博物局が博覧館となった経緯について次のように述べている。「大成殿を以て局名の博物局と唱へ候ハ不都合ニ付、博物館と改る」〔蜷川式胤『奈良之筋道』1872年2月17日の記録より（前掲、『奈良の筋道』p.4）。

²² なお、その前年10月にも博覧会の計画はあった物の、このときは「博覧会」とはならず、結局「物産会」としての開催にとどまったという経過がある。

²³ ちなみに、これに先立つこと1ヶ月、1873年（明治6）にオーストリアで開催予定のウィーン万国博覧会への日本政府の参加にともなう出品物の収集も開始されており、文部省主催博覧会と、ウィーン万国博覧会の展示準備は連動しながら進められていた。したがって本項では文部省博覧会とウィーン万国博覧会、双方を検討の対象とする。

²⁴ 文部省主催博覧会の案内状、前掲、『博物帖』、東京大学総合博物館田中芳男文庫蔵。

²⁵ 同前。

²⁶ 「博覧会事務取扱」田中芳男・平山成信編『奥国博覧会参同記要参同紀要』上篇博覧会倶楽部、1897年、pp.9-10。

²⁷ その背景には以下のウィーン万国博覧会の目的があった。

第一目的 御国天産人造物ヲ採集撰択シ其図説ヲ可要物ハ之ヲ述作シ諸列品可成丈精良ヲ蓋シ国土之豊穰ト人工巧妙ヲ以テ御国ノ荣誉ヲ海外ニ揚候様深ク注意可致事
（第二は省略）

第三目的 此好機会ヲ以テ御国ニ於テモ学芸進歩ノ為ニ不可欠ノ博物館ヲ創建シ又博覧会ヲ催ス基礎ヲ可整事

第四目的 御国産ノ名品製造方勉メテ精良ニ至リ広ク各国の称誉ヲ得彼日用ノ要品トナリテ後来輸出ノ数ヲ増加スル様厚注意可致事

第五目的 各国製造産出ノ有名品及其原価売価等ヲ探捜查明シ又各国ニ於テ欠乏求需スル

ノ物品ヲ探知シ従来貿易ノ裨益トナル様注意可致事（同前、pp.11-12）

²⁸ 2月に各府県に送付された文書は以下の通り。

壤地(おゝすた)利(りや)国(こく)博覧会(はくらんかひ)

来ル酉年壤地利国(おゝすたりやこく)於而博覧会(はくらんかひ)を催(もよふ)し御国より
も諸物品(物しな)被差出候ニ付商人(あきんど)共申合御国産(こくさん)差出候義者、願次第
御許容(ゆるし)可相成、若又官(やくしよ)より可差出品物一同差送方(さしおくりかた)相願
候者ハ其品柄(しな)ニ寄(よ)り事務局(とりあつかひやくしよ)ニ而預(あづか)り證(て)
書(がた)と引替運送(はこびやり)の入費(いりやう)ハ一切官(いつさひやくしよ)ニ而給せら
れ差送可申事、物品所産(しよさん)物并製造(せひぞう)等之著説(わけがき)ハ尤肝要(かんよ
う)ニ付、其著説ある者は事務局え持参可致其説ニ寄(よ)り御賞(ほ)誉(め)可有之事
右品物取集方(とりあつめかた)等は来ル六月晦日を限(かぎり)といたし候義ニ付有志(ゆう
し)之者は其以前日比谷(ひびや)御門内博覧会事務局え罷出候得は委細差示(いさいさしめ
し)可申候事

壬申二月 博覧会事務局
(『博物貼』東京大学総合博物館田中芳男文庫蔵)

この文書で、必ず「所産物」「製造」に関する「著説(わけがき)」つまり、説明書を付ける
こと、また運送費は政府が負担し、提出期限は4ヵ月後の6月末であることが告知されて
いる。

²⁹ このとき配布された資料の内容は以下の通り。

右ニ挙ルノ外金石土砂草木鳥獸魚介虫類並製造諸品且珍器ノ品ハ必二品ツ、差し出す可シ
土石鈹類ハ総テ有用無用ヲ論セス取集メ差出ス可シ尤土砂ノ類ハ凡一升許ツ、石鈹類ノ大
サモ右ニ准シ見計ラヒノ事且硯材等ハ其用ニ供スル大サヲ減ズ可ラズ各二個ツ、差出ス可
シ

草木類ハ材木ハ長三尺位ヨリ短カルヘカラス枝葉ハ凡半紙ノ大サ程ヨリ小サカル可カラ
ス其他皮根蔓茎等見計ヒ差出ス可シ

鳥獸ノ類ハ便船ノ節生鮮ノ促送ルヲ佳トスレトモ日数重リ腐敗スヘキ者ハ肉ト腸トヲ去リ
頭骨ノミヲ残シ乾ス可シ成ル可キ尤ケ羽毛ノ損セサル様致ス可シ且生活ノ時ノ趣ト眼玉ノ
形色等別紙ノ通り書添タレハ最宜トス

腸内ヲ去ルニハ肛門ヨリ腹ヲ通シ裂キテ喉ノ下ニ至ル他部ヘ傷ク事勿レ又頭骨ヲハ残シテ
脳髓ノミヲ去レハ最妙ナリ

魚類ハ尋常ノ製法ニテ産物トスル物ハ其促ニテ差出ス可シ其他ハ自然形ヲ損セス唯肉ト腸
トヲ去リ乾シテ差出スベシ

介類ハ殻ト肉トヲ乾シ差出ス可シ又小ナル者並蟹海老等ノ如ク又魚ノ小サキ物ハ皆焼酎ニ
浸シ貯ヘ密封シテ差出ス可シ総テ大小硬軟等一所ニ浸ス時ハ互ニ相解レテ損傷ス故ニ海草
杯ヲ入レテ隔トナシ其害ヲ避ベシ又乾スニハ塩氣ヲ去ルヲ佳トス蜥蜴守宮ノ如キ物ハ焼酎
ニ浸シ差出ス可シ

製造物ハ風土ヲ見ル可キ品々其他何ニテモ製造シテ用ニ供スル者ハ必差出ス可シ
右鈹物植物並製造物トモ必其物ノ産地並用法ヲ書添差出ス可シ総テ至テ得難キ品ノ外ハ何
品ヲ論セス必二品ツ同じ差出ス可ク又小ナル物ハ数多キヲトス

(田中芳男『博物貼』東京総合図書館田中芳男文庫蔵)

³⁰ 『海外博覧会本邦参同史料』第一輯、博覧会倶楽部、1928年、pp.10-11。

³¹ 前掲、『奥国博覧会参同紀要』p.14。

³² 橋詰文彦「ウィーン万国博覧会の展示品収集—明治五年筑摩県飯田出張所管内における収

集過程一」『信濃』50-9、信濃史学会、1998年9月。

³³ 博物局（一部博物館という名で発行）作成 教草として、たとえば、葛粉一覧（作り方を掲載、説明書き、）糖製一覧、藍一覧、製茶一覧、産業や産物に付いての知識の普及を目的として、幼いうちから各産物の概略をしらしめる。1872年から1874年にかけて34枚刊行。またあわせて使用方法を記した物、製法の講究、は博物局が教草として作成。

³⁴ 前掲、『奥国博覧会参同紀要』上篇、p. 1。

³⁵ 生糸、山繭生糸、織物類、縫箔物、組物、漆器、磁器、銅器、玉台、七宝、竹器、藤細工、鼈甲細工、鯨骨細工、革、水晶細工、瑪瑙端々類色々、彫彫物、書、団扇、紙類、蠟、鋳物、宝石化石類、動物、植物、金鯪、鎌倉大仏紙張抜、東京谷中天王寺五重塔雛形、大太鼓、大桃灯（前掲、『参同紀要』上篇、pp.26-34）。

³⁶ 土屋喬雄・小野道雄『明治初年農民騒擾録』勁草書房、1953年。これによると1874年までは、年によって40件以上の騒擾が起こっているが、1875年以降は激減する。

³⁷ とはいえ、この時点において政府関係者のなかで博物館と博覧会の区分は全く意識されておらず、博覧会で収集した展示物を保存し、定期的に展示する場＝博物館といった認識にとどまっていた。1873年に文部省博物館が太政官正院に属する「奥国博覧会事務局」に併合された事実をみても、またウィーン万国博覧会出品の余剰品が山下門下博覧会事務局博物館に収蔵され展覧に供した事実からも、博物館と博覧会の混同は明らかである。

³⁸ 奇しくも、大久保はその死の間際の1878年、次のように述べたという。「これを貫徹せんには、三十年を期するの素志なり。かりにこれを三分し、明治元年より十年に至るを第一期とす。兵事多くして即創業時間なり。十一年より二十年に至ると第二期とす。第二期中は最も肝要なる時間にして、内治を整へ、民産を値するは此時にあり。利通不肖と雖も、十分に内務の職を尽さん事決心せり。二十一年より三十年に至るを第三期とす。三期の守成は後進賢者の継承修飾するを待つ物なり。利通の素志かくの如し」。岩倉使節団帰国後の1874年前後はまさに、内務卿大久保の言うところの「第二の段階」。内治を整え国内産業育成への過渡期だった。

³⁹ 石附実「岩倉使節団の西洋教育観察」『季刊日本思想史』No.7、ぺりかん社、1978年、p.6。

⁴⁰ 同前。

⁴¹ 久米邦武『米欧回覧実記』1878年（田中彰 校注『特命全権大使米欧回覧実記』岩波文庫、1877年、「夫欧州列国ノ大小相分ルハ、英、仏、露、普、奥ノ大国アレハ、又白、蘭、薩、端、噠ノ小国アリ、国民自在ノ生理ニ於テハ、大モ畏ルニ足ラス、少モ侮ルベカラス、英、仏両国ノ如キハ、ミナ文明ノ旺スル所ニテ、工商兼秀レトモ、白耳義、瑞志ノ出品ヲミレハ、民ノ自由ヲ遂ケ、各良宝を蘊蓄スルコト、大国モ感動セラル、普ハ大ニ薩ハ小ナルモ、工芸ニ於テハ相壤ラス、而シテ露国ノ大ナルモ、此等ノ国トハ、猶其列ヲ同クスル能ハス、奥国列品ヲミレハ、勉強シテ文明国ニ列スルヲ得ルニスギズ、是他ナシ、民ニ自主ノ精神乏シキニヨルナリ。」

⁴² 久米邦武『米欧回覧実記』第25巻「倫敦府ノ記下」（第2巻、pp.112-115）。

⁴³ 同前。

⁴⁴ 同前、第83巻「万国博覧会見聞ノ記下」、pp.21-52、

⁴⁵ 前掲、『奥国博覧会参同紀要』上篇、p.57。

「且右科目ニ所要ノ機械必要ノ書籍及諸国産物ノ見本雛形類若干購求交易シ来レル物モ有之諸料実地試業ヲ経テ追々學術ヲ国内ニ伝布スルノ源路ヲ開キ又博物館ヲ創建スルノ用ニ供スル目途ニ御座候（同前、上篇 pp.56-57）

「尋常学校ノ能ク教フル所ニ非ズシテ最捷徑最易方ナル博物館ノ建設ヲ要ス所以ナリ」（同前、下篇 p.6）

⁴⁶ サウスケンジントン博物館が日本人に与えた印象は大変強かったらしく、使節団員の日記や記録に散見される。岩倉使節団に加わった内田正雄はケンジントン博物館に付いて以下のよう述べている。

「「ケンシングトン」博物館ハ専ラ世界ノ人造物ヲ集蔵シ器械学、製造学ニ関スル物品陶器鉄器農耕百工具ノ具、蒸気器械船艦城郭築造ノ模形及ビ万国ノ産物等盡ク充備セザルナシ」

(石川正雄『輿地誌略』4巻、明治6年、石川県学校、50丁)。

47 第4芸術部「此区ノ物品ハ殊ニ形状彩色模様等ノ優等物品ヲ網羅シ彼我ノ妙技ヲ示スベシ」農商務省博物館(「博物館分類一覧表」『農商務卿第一回報告 明治14年』(『明治前期産業発達史資料 第4集』明治文献資料刊行会 1960年、p.200)。

48 「明治十年内国勸業博覧会出品者心得」1876年8月9日、内務省布達甲31号、『法令全書』1890年、p.498。

49 高村光雲『幕末維新懷古談』(岩波文庫、1995年、pp.122-123)。

50 民間が出品した31点のうち、20点が製造物であった。開拓使事業報告第二編(勸農)附第6集(物産)、大蔵省、明治18年、(前掲、『明治前期産業発達史資料』第5集、pp.444-445)。

51 開拓使事業報告第二編(勸農)附 第6集(物産)、大蔵省、1885年(同前、第5集、pp.451-458)。

52 なお、展示品は売物と非買品に分かれていた。

53 矢野龍溪「A 舶来品に模造セシ博覧会場ノ雑貨」(明治10年12月3日付け)『明治十年論説』(大分先哲叢書『矢野龍溪 資料集』第5巻、1997年、大分県立先哲資料館、194頁)。

54 西欧から新たな文物を輸入するばかりでなく、国内製品でこのような博覧会の有効性について佐野常民は、次のようにのべている。佐野は日本人は古来相伝の術を守り続け、また広くその手法に学ぶということをしないうえ、技術が進歩しないと、尋常学校に替わって博物館において技術を伝習するべきとのべる。また明治29年の輸出高が明治6年の5倍となった点についても博覧会や博物館での教育をとおして「幕末以来僅かに舶載の商品によりて欧米を揣摩し、只管に喫驚をきんぜざりし我国の産業を覚醒発奮せしめ、以て今日の基礎を形くるに至れり」しるしている。(前掲、『海外博覧会本邦参同資料』、p.2)

55 『明治12年宮城県会議事筆記』3、(佐々木和博「宮城県における博物館の嚆矢—明治12年設置の博物館をめぐって—」『博物館学雑誌』第16号第1-2合併号、p.23)

56 前掲、『東京国立博物館百年史』p.56。

57 なお、この東京教育博物館に影響を受け、1870年代後半以降、大阪や島根、福岡、鹿児島にも、規模は小さいながらも教育博物館が誕生している。

58 正木直彦「教育博物館の組織に就いて」(『教育界』第3巻第2号(臨時増刊)1903年、p.1)。

59 同前、中川謙次郎「東京教育博物館に就きて」p.22

60 同前、佐々木吉三郎「東洋唯一の教育博物館」p.44。

61 地方に設立された博物館も同様の行く末を遂げる。教育博物館の設立に尽力した田中不二麿ですら明治末期に「其後二三地方に設立する物の有りと雖も、特筆するに足る物少し」と述べている。(田中不二麿『教育瑣談』1907年、(『開国五十年史』上巻、原書房、1970年、p.739)。

62 坂田吉雄「明治維新における変革思想の展開」『ブルジョア革命の比較研究』筑摩書房、1964年、p.400。